菱屯兄閑集　思

リ5
2081
5

見聞集巻之九

目録

江戸町衆にては猫つなく事
老若共に[illegible]する事
鯖の肉は毒ある事
萬[illegible]法華宗五百人[illegible]事
武蔵と下総さかひの事
木能寺[illegible]事
年始禮よけんくわの事

早稲田大學圖書

江戸ノ町元禄とあひたる事
新福寺談義そゝん志んの事
孝行夫となる事
唐承形ししめ候ふ事
捕り男大河の事
旅女ともに寝拂ひ為る事

見聞集巻之十

目録

浄和新観音に日詣くの事
撲云庭に行ひ形る事
伊勢東國一見の為付武州法華あらしの事
茶次に手酒をすゝむる事
継居無身のものに人あつまる事
神田大塚小安の人火で焼れ事
江戸ノ町ノ風流の事
江戸ノ大橋より毎日市立之事

他乃死をも知りける事
湯島天神繁昌之事
長老法服世に廃りし事
町人俳諧一見の事
花乃浮世の事
老人小童に成し十事

見聞集巻之九

江戸町元ハはしに新つくる事

みしハ昔、慶長年中の比、江戸の町の繁昌の事を見し
人門にいひしハ、江戸ハ山なくして、新をつくらせ
海辺をうめる人ハ、やまを大名に仰て、伴皆
このもの、此国にしてこと〳〵く、うめし〳〵て
たゞ江戸町の事あつて、やさしき事しまひて、人々
見てみるに、三年目ハ、此国大名のちへ、いとしく
まちを新をつくらせしハ、此町人のちんとして
此余の振舞に、しまもの、れがの、ものかハ、将軍大家

府の使者とやかくつくんなとそれ時はまいい人
やうんもとらしじ無勢のともそれこともかさうら我
ホかあをとるかたつしたやるいりんこほどいまき
まきなんつかしつもしつあかしさよ只是大
若しき御冠者の物云不躰也ーとも持をさしく
無理しらへいてんまきとし猶さも出るさこ若を
かなかさるれたをしんれ面世の風俗もしるは語りかき
慕しものへ面しけり

色闇冊子持ちし事

みしんと兎牢とうや牢りら下京と若き法者

雁いくつきとおもとをき伝をあらしとこく坂山城
國雲泉山乃城にし宗のいと新のなかしくに居
住しかりしかば毎月朔日一刻ずつ世間の者持を俗
清らか世物語を申人を出しく相物をかしくもよか
ゐくるにんよいかし色にしいかくはなしきを申京
の月にみよし伊申をゆかしかなくさけりかさ申
の事かいと家来しを誰くもこまかさきを
いさくきし月の朔日の法とくいにを始そ不して
在京まかわりしかは法事に随分ぞんしと見あ
女郎集ましいい十五六年の花むんびげ白髪なるう

ここへわしも高き座下におりてあるまじこれ仏法世
法は車の両輪のごとし かた車にてはゆかれまじ
ならびに仏法経文のごとくなし若は法しりし智恵を
もちながら学問せず 新発意一代さまたげを
廿年二十人経読し 後の世をねがひ仏道ありしたその
しるしもあらんと仰し 拝見しけるよしと有名人
山に入て高く春日和尚に相逢ひつつましき人なり怖し
了経非問く極楽へしも参りしとへい和尚
前世の縁なくつれしも和尚とともに手段の極
楽し 地獄ありとばんのよし大海へ入きんに

蓮花のうてなへぞ叶はん 先地獄より入迴し 宮に
文武人 吉をうけ行はるる道へこそ叶んと思ふ信心なく殺
生せしめ 殺生をうければ地獄に入る 矢のごとし と
いはれぬ 是も仏ぞ知らしこれぞ仏は現在の代
にこそ 生まれ来るとなれば後世をも彼も知り給へん
現在に三世の因果を知りてなれば後生は
前世に仏法世法は車の両輪にして 田文
世法便りよりいふ神にたのみ父母に請ふ
ちかひ去りて若き法よりたのもし
むべきに経誦せず 君とあへて 八幡

りざうを施のたしぬしと孝経にありかまへてらく
天のいのちしつめの心のいか事は初稚にかくしきらくにこゝろ
ふししにかうらくしいふ地の宝をもちてかへして生活の
ゆうくべしし我身をたもちて沙汰不孝の
しりうる死滅しし人をもちてかへしてそのいあらしめある
孝は人としてくさまんは保をとめしてこそ父母安楽
の源人しらくさまんいのの信をも記しかしだ如
言諭の心は語しきだんぶ人をもちてかへ
てに一世のしまふにをすこれ是須をなくあ
かへさんれどとも是をとる事雑にし家にふゝ府

らし備乃やもやこらん之生をしなくはる所
書中ずんしもとじ一つこもあらう是いふ何ちの手両
ふはし神にふ心中のもちて外をも有しての
りぶてあとえ人のおし向はなし是にはし言語
人名あり宝庫しし色あるへきえ文字の是ましく
言旅とそこえびうかぎしくてもし雑をしなの
ふしし美ぞ彼る蓮き不中にぞいしもしく
尽くし備にし吉なる中由にまし死の将安
のいさかとう武へししまつのちりはれら
わ月しく天雲十たうれく出南の心はるし

されとも快有ものや家安といひしこしく
失人々か此人々と勇者なりしとなり人々とは
能くしも事さらいふ事にしも同家安善くし若狭
孫に小庵とていふ宗拾と郎氏安か孫に一諸かち
しこし人々宗易にめれにし国へしき人も富る人と
高本後文京名しりし家利休なりしも名たりしか
同様にて利休にしこ養しけりしれ無たに宗と利休
一寺利休尾張の国に月々尾張に大あるにおかし
事からしかもちれと本同様一寺でて一同すこし
と海とたしもおめし心されにもそ人なりしあ

同様の云ことし右人に宗之利休なりなる利休半
石にして為人のつかれ一とかは安之つらし人
茶物し為けらい物類らいさすかんなる名
あるいはを中よ気にとなる庵し去説る丸物に
あともなふ若必雲ものへしし之る若は汐佐の
二字にいとてと気しめりまいふかる息
今しいさはとえ中しと押れしるえる付合
乃及用とふしく非めくさとも気しと押てと非
に明く能に今かな世云常徳に同さ條の今云
と成氏なる之見とし此の氏之は見る日由ある

事なくれ
一第一人間の定命百年ごとに不定なれ事
一第二家職を沙汰なき事
一第三孫をも法しかり安りし法る事
一第四思ふちんは法しつく山しと為る事
一第五志母しまし身を法しもする事
一しんじんの一心為すなれば諸をさく用いざらん
とし首我儀をとるへくまし上られぬふしお
ゐしん安からしく命ふゝあきゝゑんやうに於し
小人を糺しよしむ若子は二所しとをのしもしるう
是を年比とかりしそぞめなる法の事を
なけりはきらふ付れのとぐ為く志つゝふかくし
ちかづら家書の方りいとしさるとなかるしそと
いかりれだ皆人中くく新をしく居てんなとり
雑の問り毒る事
みしなかる人のま人目々しまれ不く好事
あはぬつれをゆゑにまさるれ是む何のまて代家し
中さんあさいしし紀斎へ為きんし元しとしこと
いへ為け中に去人中さん是はなは年寄へ秘しへ
恥を見ぶりこへたり家の物へ無用人皆に 銘汁好物

されども青所にて鰒にあたりしには鰒けよしといへは
ことさら人鰒けのみて用しかしとは露白なるにも
偏きるへしただ鰒の毒にあたりしにはよろしからず
咲かし鰒け安き薬かと能とも家にあり貯へ置けは
相知人のうち中村源右衛門といふ人常に鰒けを好み
しが去年廿貫鰒の肝をあへ汁にして喰ひたるつき急
死をもとめ見苦しかりしとそ 鰒はおそろしく候
又西年伝馬町にて長三といふもの鰒を好みしか
首昨年鰒をくらひ死けり借文状にあて一丁はなし
鰒をくらひ親子りんぞくして七人まで一度に死せし是など

えしいかに達者なりとても鰒の毒は恐ろし
たま我も此つて廿貫鰒汁をたべ申ましたと
中にれは去年中小竹田藤右衛門といふ者毒汁の
先生方の言ふ事のみを聞いて一ぱいせられ候今は
たださへ鰒の毒はさしてよき死をとげたまへよ
不申是ハ我也我か家の人の者は律に鰒汁をくらひつるが
くるしみもなにかありたる人を見て詳しく何ともなや
ら言ひわけしかりし鰒をくひしハ酒をのみ
多かりける時はしよつちう外へ不うまれた酒の毒
くのことくしに却て酒にて毒を消へ物をそろしく

是ハ鰒なりと酒の肴にとうりしを程なく死す
是は落たる酒にあたりし鰒を食しては諸々にか毒
亦人も同しきはのこしおきたれども家に鰒をくひ
てたる事なしと語りしに別にかの殿へ鰒
を食用しけるにそれはさはなきに是非の諸法を
立てし我死人世の為に是をしらしむ医書にも
鰒は大毒肝に毒ありしと志をしるして能々心に去
年通所にて人々を多く鰒料理せしに廿余人
立あやまちしてなくなりし生鰒をもとへし肝をすて
捨血をもすへし骨をもとり皮をもとき

ましきはしらくなりと摘て一時に煮て料理し
たれは人多く食しなせしに其内四人ハ即時に死
三人ハ十日斗して病て後わつか生きる人もあり
その人の志をまもりける人の命ハ鰒にては実に
死すしと云わくはなしと尽しのちも尽し
たり人もし時の気はやく治しはやく治し然に
る末代ハ人の性も違ひ素の内なるゆへに多
く死ぬるの必定なれば鰒を食して甚々病し
おそるへき人の命ハ仏にても知らす牛馬を
毒ある物にて治まりて此年の頃より取るべし

其上殺すれともきたなし無用の味ひをこのみし
事甚し是につくし好みて殺すりかへし破
戒して死ぬる後ハ牛ハ畜生となりてかまた忘
らるゝ也されハ殺のまよめハ命にかへても猶そのかなし
天下にまたさる大切の命を殺しけるあはれさこそ侍れ
毒害して知らぬまに世の人のをしてしゃうされし

萬死法師にゐるとこのうさる事

少しいかつ今は昔ある所に萬死法師といふ人ありしか世
間の人富貴にてありしはさしも不便なり法人年々
肉をもまゐりまゐるとて物をもつゝしゝ侍るのとこゝにゆるかそ子

細なるや紀伊が殺しけるありしやまつ世もいふ
たうくれ文より仰ことく年月盛をつゝしみ
しかめうて文を秦穆はいはしてこゝろもおこしあつきぬる人あらし
こゝろひとしくしけれはされといふ縁に云つ俗よ皆人
極月はかりある家にぬまいへるの殺ひのゝしめおこし
魚をしる畜類の肉を用ひ事より是はいかなるそ理に因を
合せるいはて死ヲ称とて協ありて偽しめりもへぬ
却しつまさりひとをまして子にかしきとや節分の大
豆をまきのまめはまゐらせ又神を殺ひは法人寺人
とりを他の殺をつゝ文殺ひのことも是文全ゆゑ

し後成の述懐の序に法りなかりて若き手なし給
ひてはしまして年をもちもてゆくはぬきけるとて
御ありて元日人あしく思老をわすれぬるとて
み細ふ別なしことさら汁里の行き留しいふしくて
云前日りかをとしふ向まふ老のまてもして家備
分かりぬるれし去りもしらも去年しわ
ことわしと年をとしも三れは眉白かりこし
かくて年少も元の若きも三ちりかわしうてさ作
なるの年の善しうてもつしめしきは年のた
しかの捨遣しかくふまでに我身よ様子とし

月をも送りむかし何とそもらんして華成あり
人の春をもさき月日をる見るたくは唐訓は
華のこしさるに死りもしるに兼見書とはふ
るふしにいふ義めしたるる法官付はる
些や茨み比良篭き外へ福は閉てしありぬ叢豆よと
入ぬをとをつきく菊ありしちるとも事しふ兇おら
ひしも序連歌は海あり是は大内よくれまへ
ことの乱忌を商ふへて天下は歌も春の御のなき
是仁義のりし人倫のたまつ秀の命なり去序よ
むつきこかり来れまりしあるたしこそあはれし

治まらく八年ハ汁めりし祢さり人のうしめさ
しまき中にひらくいさしけり寿命延年の
法く天子のと元正の寅の時清涼殿東庭へ出御ありて
星を拝し給ふなりこもの星とも明の雲の上つ
光のしげき事にと東つへと拝さりさく二年
ときをし寿栄とのぞし福ハ大旭と宮なしよらし
悉きかの上ふ出し入らししらし人のえのし
御代の萬代の寿ほしめり祥とを始めし萬代の春とを
万歳を富へかれ正月の神ハ安穏にんと天下に
乙形ふくきし寿を寿他文徳天皇さら御代に始まり

神としまつり一切家庭ならいきしししまうこの
平日清精をうけ妻乃来るをともとし〳〵もそ
ふしきハ年とりはしまる歳草門をもとさるか
陽りもとの東ハ事に五事安しましくる人の
ふかりしおや正月節分の記念して其の日の柱つ
とし法令を差さし二枚の松ハ神のもと節分宮
けられと桂津二ととしハ波とかしまり桐まし
白露もとし宗を正月節分一人宮のめハ一家宮南一家
のめい二星とらしこら元の禄を用る家子里けけ
出るを迎し千首天皇の作明事で一人の大外達

あり名付て大悪王といふ王ありけり 下の
大邪道にして仏神三宝を信ぜず却て海に
ミの人を悩しければ加鳥帝王彼悪王をせめ給ひて
国をはけんとして薬を以て悪王をめし人民を
あまた分ちて是を食物となし悪病をやめ給ひ
ミの儀式を国にのこして七草を給ひて夫人
儀式として国々是を正月七日の前後の事とし
として七種の粥をたて彼大悪王の肉を切集めて
肉羹餅となし姿を是を食して一切の人民の命を
のがれしとぞ思ひしるし大邪の悪王形をたる正月

七日に今日といふ三月三日を仏頂として五月五日を端
午として七月七日を七夕とし九月九日を重陽とし
皆其日を五節の組とし元日をさして漢古より行事に
作る和国に乃とゝけさす事を朝夕と云しより古元
始りの宗の善事とて結び給ひし五節の身
古の国に和斉の国ひらきおきける事は盛なる
あらこそや和そ朝たえし和朝く民の當由る
春秋の行われと尊ぬる事はかなし紀色付
ひしぬ作文人の祝ふねし色さしまミのた
き付侍り小野篁卿を織りし翁は春の元日小日乃子

やひしの国まじりつの歌しく中作られ新古今
ふ本かりし之は法然上人も乃まれと詠く、のこと
思しまうれしと海まうる国のな白ふ見本下るそ
花さし春のめくみやしをせしれさう法も一見そう
しもえたとふ給ふことし、うしん昨ふ筆れせへ有
華の本事を支円用外典ふ書て紀も名しと皆人今も
申けまうれど法師返答をうへし、
武蔵より下総とさうひの事し
みしいとの角田川ハ武蔵と下総の中さう入て流
まねされども川なくばしりなからうふと下行り

あるくふこ此ぬ男ぞ云けり浅草材木売りくに下
総の国と存するを隣家の妻しばしば通ふを
聞くしくお月ふるれば由んしせんとて再よ
存じよるひ入海らひ。。。とて見へたる年此島の筆く
無鉄さしも世年経てつとへたると給ふくそえ
うち隔く利口をいひしく年しぬ人古方に
うる内をそれくれ髪を嫁けさせ申しつかふ
ての神なる縁ありしく讀しい下総の小牛島の事
やまと名事うしとく思ひ出せう芸はくうし給の
うしへにも見えと云義なりあまひ存す武蔵のろをと

記には和銅五年五月陸奥国の馬ふしより
元年に孝謙天皇の御宇にはいと崖根に出でし
かんかいと云ふ生みの者ふ折りて保持して捕りてこ
あるもの也けしけし昼と見てわかしこれをば
やうやくに老翁の時にこそ又元正天皇の御宇下総の
地より奉りしがすくその国境といふなる人
しらずしてるはしきたる事のふしぎなりとて
老人が家は貧しく水を古人も中
されば此国に六年六月国より奉る事は元正天皇
国々の水を汲みてけふへ八十二年経て後ちに六年

六年の国より宮女たてまつる文武天皇の御宇
またの浦島が子は雄略天皇のとき二十一代天
皇の時御用をつとめしに天武天
皇の御統て皇極天皇まで八代の御代を過ぎて
三百八十二年へて入蔵せし淳和天皇の御代に人々かく
石川国よりの流れて来て其の時代に大隅国に見ゆ
孝謙天皇の御時より薩摩国に来りて多くの日本に帰る
又其外の人々の国にてれ人形に写して
語る島がいて草木山川まで変りて近国にかへる
てらすの人々見て驚きしかとも中されし

羊毫筆の捨る事

みしは今時の本大学生の中よりは人出で来て書院し
いふ者も申されけるは大坂御陣の時に船を出し
胡麻ひるひたき所にかゝる家に入てある所の月
にけらる時に大名衆のはやり多く行ける一押の
申の時を先生に甚多筆をとしけれは書に及と
研を出し筆硯をとりし物どもいつ字を出し
まことに書きけるに大学の字多くはれる文字の
しふしの字数多くかしく書きてをきけるに出る
書硯きてされは甲冑の二字を見てあらはるゝ

漢に至ても礼記の書にも甲とし胄とも書
書には此二字乃ともにありと和漢共に違ある後よ
日本漢にも聞く人は礼記のことに書たると
見し違へる事多く人に出して見けるにこの
かりしの文にあり相違なく人はそれ見けれ
に申伝へにしまたるいは筆と換て良家に
存ての事を聞けむ人に強て書もけ文士等の日本は
異国の例を学ばしくへもた遠の後に筆を見
とかけく記しけしけれど遠別にはつきよ
よりも重し両年の用たり教をすくし深し

御城へ中古の文に見様物人様外合しるあり
正字交来なし是も依して消息は筆のま判札のも
假名にて書きしたり正字ハ手紙の為めなり
云しれたらふとし云字甲冑の外より多し執筆け
半紙の文にも是をかしたるや假正字隨てしたし
いかにもさし當て用のものには假名にて云く
くだしたるへし雜字をも書くも讀しもよし其用
潤けし尚何乃益なしとして中に道し
年物語しまん人の事
てんしハ京通町に来住しけるに老人有り　新

五郎といふ若き人ありける云ふ所は芳れしきなる
に金銀より何に住せ年いかほどなるにも老
人まさりて様とらして年之方ともいふいで年ほ
草につる物なれど物のまはに何事なともさんて
思ひたる家はなく實年比なき勝之冥
是は法度にも祖新茅ほとして何に中か中に
させるへしとて詞を中くしけるまでしるしける
老人のもし様をと之を中に住居をも知りて中川か
年寄なきへのうちにもえて久しても老人
ふくさとし若くきう彩の葡が去中川ら老く

されど鼻のたかきやさしくつくらん鼻筋く
みえたり我か郷にてはやうかくれんしき達人
しらぬとおもしろき郷のむかしを見せけさんくる
ともかくれば文花人体もおもしろき男色とも
ことにまことに紅かしは卅人たちつきはひとしく鼻あ
ひとつくへ後志にとせしはまた二人の人なりしが
又にれば又紅白深の小袖の風情く生前の町人
ちひやしく月の事生まれくひらけ申しは新作出る
のこうしくちかく下りしく其の柳枝をはづ
じいさ少のつく持をとれる血の苦しき後を佳ぶなる

高祇性し候とも而じくすくし白をいふ也あし
人達ありなれば五里の所へ連てゆきて候も体
色しくは云ひこれの町人気色を受け江戸のあ
二所は小日小く立まれにて地の物脈あれはせ
脈し候しまてくち気候ずしきまたとちまたは鼻の
そこにて痛むつしぬける脈の方しさらはあや
ひやうし腫くる体あるを見貧性なは体くもし
終候し評人しくそを程く料理なる人との
ちらひしくお後しくて居りなるかとなる人との
まへ人こうとして申されけるは芸人に対して感情

たとへば先をつくるは世中をしくされども荒野の道
文をとりて、ふ 世に二に而ていらしくおかくは人の為代
世をおさむるは川中にはゐなくこれなくあまた人のためにせし
之は先ず剣ら悪党人二心なきにに之一旦のくらゐを恨悪
しぬまじく人との出家もせられ水火をも辞せし
ちかく善悪の心をまもりて分別をる人は下愚なる小人はたちを
二心なくきこえて、つまりしといへり 是世のハ命に身をまかす
ありしだに人の口として猶さら形をまもりて頌せり 是
此は年月を先として心をまもらは口をつゝしみ心
あるひはたとしたのみ 又云 口にて先をてらして心の門をやぶらん

つゝしみ心の根本殺のわざはひ悪言 口をとゞむるはまことに
以て輝しくあけぼのはたのむれ心をたもちあそび
たてまへは一方をとゞめんこゝろをかえらすよるつまる
しかるは人の勝る人をとぶらふその命をしらず衣
寄る世の中はそのたゝりまゝの身を思ひかくはして
かれてのこちたるゝのちなまめきて 感言にて
まじめ思ひて心にをしてまことにはれてこそ 此ことばを
しいてあまきは是も善悪を疑し善悪をたゞすもの
ハ口のもちひかた也 理をもしける 家のもとになるさとのうちにされ
此を所司前をとのむくひをあらはす文

みしいて堂上の所人しるくまへしきまとふ
官しくおりつりつゝける庭乃おもしろくかも
為家をしと点歪随追へ隣しくしくもかゝるまひ
して後はしきお事そしめ一花をもしくまれば
堂方の夫宰して紅葉乃垂れおもしくおうきん
古れまれるりひゐ思ひとうしくへふ詩の隣陽
三月春旅のこうしく仇まうゝけるも左由気し
思ひ家たいて望いされと花都自ひらん
娘んとしくおさきまるに花のちうち衣そ庸
と浮ぬ人を系しをへきく多ゞ雲来泥の生は

九重り白川んほとりには君も哀れ多かる
政ごとくて仏法も法さかんなりしく花も春も
しもうしもかたらぬ世の治まれる人々うまじいと室
仮ひかくてう左程も忘れ花合頭桜し白くら
思しめし文めぬも成時代なれば花もなから
るてや白れん人の飢え山風梅風ふきまふく
めかる花もやちりなんと硯屏紙のとも こそ
こし花乃下け桜は雲に似家のともしとも かし
詩やうたにおよび朗存をもとりしさると是にけしくも
花しへ詩人家人の花の跡として両由られ秋頃ら

詠しけれはやさしく覚てまけりける其夫の松は出け
花のころ芳しらん人門にと詠ぜり西行法師はねかはく
は花のしたにて春しなん二月の望月の頃
とこそ詠しけれ楽天が詩に遊人盛
らく花あれは便人来往して親疎しとらんぜ
すし他まつ紅色の発白に武蔵野もまたなん
花の在所に文を遣しけるに一本桜ぬ都の南東し
しせられし宗盛町の女ぞ住けれ
ありし首に是都の内乃家居に花を植しく
あはしりふまふ文しし花隠しとそ好ぬ事て

集にみえ侍るは柳桜をこきまぜて　みやこぞ
春の錦なりけると素性法師も首尾をし
桜町の中納言といふ人は桜を愛し給ひて桜
をこそ吉野のさくら代植し庭前に住けるに
屋をならべ住給ひけれとも皆人は桜町とそ
町とよびけるに中納言をも桜町の中納言とそいひける
七日しての花のさかりちるを歎きたまひて泰山府君を
祭り玉へはふしぎに三七日のとしの花はへてちりけれは
おそれいけしくみえしや桜花人神のうけしかれは
むかしありしは其のへてりけれと詠ぜり皆人々

宵は菴乃下に臥しか月待ほどにあくるは
なりし折節の秋の夜と花のおもかげ
も那く雁がねきこえしは虫の音もきゝなる
こゝのとは菴も大切になりけん
されば宗匠もよしなしごとならぬ
なくしいまやいたる由しさむしきもまた
おもし陽よりのちまことのは素月家支なり
宗祇の発句とも方まゝん蕉月傍月の名を
られあらてまらへしくまんがたきせいふつまき月
とゝまて心をふぶは林の月の月もまけまゐるとこゝ

月もかへ春も秋も偽りぞありしかなむかしの
たゝずむ心はなとゆへしとなへしかあかつき
あなかし中にあらし菴を書月の筆はしめ
或人是を聞て中さればまた又人の句をつけ
花の香も生死のはかなき流転をはかりそめの
いもはまたふ古今集なりはまた月をまたなみ
見えしこのはじめとも人は菴ときこゆる浮
世なりとし沉ゑのしらべの寂滅のまことになり
海のうへ本源をとしと心のかく春雨菴は竹社まで
またもかしくなりたへ人はこゝろの哀をもかけぬる

事を知りもしとかけく清々は写まち志まま
じまさい世を変ずれはあしくば此世のまことをまもり
まつすり俳諧を清しともいひこそまめやかなる道
徳のとふろ翁が妙を世あく志実は解脱の門に
入らんとすることなかし、されとめしとをあひ
ともしきさきんには偶面しくへしまちまりしく
病して千さわれど謝白清き禅子のくきまする
一つの硯を持して宝としりたるを禅子めでとりて
はらへば志のとしかえてとひかれた羅行と
京へしも其硯をも捨てし志のとくくは吐くとむ

その二つをとして旅のうたがひをかくし入れ
荘周が行脚の程ひつの内に胡蝶となりて
百年は花の露をすふて見てなほ洞花に
百年は花に遊びて明しまん此蝶の世界の夢に
してあまりしとめぐりしは人の見えぬは夢とこそして
つれづれの茶の下にたくむもあはれなりてに乃
なりんと宗祇付ておもひし是繁なれる
白ましん気を楽しむに以て是は時なりいはしてるや
はれまぬらん 荘周や夢みしとりん花の
本の寝にとらなき夢の世をまよひてなせり

新古今しるしもとめてもいふかくさまとめ集
数あつめられしかはしくまれにて派をもちく
色をこのめしくまるものもとものしくうしくまき
乃なる人の人貝ゝ又歌の二つに迷へるかたなりし
新撰ひ桃花ゝとかれ済世ゝ草しきりよけわ
令をもて目録しのこしそしく世をたらしいは出記
前にいりの彼に入ぬくしてぞやよらんし
新福寺清はくるゝん志んのそ
ありしは首後ノ町尼寺のうつり物は明済に
しかと新福寺といへは惜を新開のとを応なとこし

らへ寺ととに至この寺をつゝしく業代めくりし
さらあらい史にしは天下をとら形し法侍の集る
ちゆへしこいへしもはゝ鳩の家康とあしくされとこの
法ゝと存よしくつをまきてそこり新八幡宮は武士の
氏神と康ときのしくそして日本六十余州し
大ぬきて代々つぎあかり大名に名の家し村里は
近乃其宗まつくも法しきゝもさらなしんはらをと
ばしかや七八年以前にしのまかりしことそやいつまく
家康をたまのあらしもらへつきて史記とたけいさく
さんとしへてこうぞしく云二事ある形るいかなかく

さて延命院しばらくは但馬大ニて上手にて建立す
しくやなれしん首頼[illegible]法華四年の[illegible]
へ出入先に鴻巣の[illegible]に[illegible]月[illegible]
何[illegible]菅右衛門に建立[illegible]の[illegible]れば松
な杉[illegible]の[illegible]
武蔵の国[illegible]
平[illegible]肥後[illegible]年大[illegible]
[illegible]の[illegible]
寛和二年七月[illegible]
[illegible]関東の[illegible]

[illegible]社[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]文人の[illegible]
[illegible]
中[illegible]今[illegible]十年[illegible]乃
[illegible]櫻田山へ[illegible]風[illegible]
[illegible]
[illegible]草[illegible]
[illegible]
[illegible]渡[illegible]

すなはちおはしましけるに天神国土のきんぶかにと
いふ在所に首ありし山桜のうへにあらはれし一つの大きなる
士何者ならんとてみな之下とも左保のこゝの修験七宝
まことに他人の見るところにて北野にして道摩の御国にあらん
とて皇より人命くせん帝へん駒にてゑ龍まちけふ
ろいかくはなせとつき生まれ菅丞相いと誇ひ
御宰とて天満自在りてかの社祥集むる本にの
国人皇とあんてわか氏非に薩へしまてし
やもふし人みなれ大臣とめけり枝之出し何の
むらき明歳しく大臣なるに拝せへん社揚

皆人命之宗る神の人のうせまりぶしく威をあらは
しいづるおひはしれあるまじげんなりしこまり
おほしましたをいひあらはしをちと国化けりだ着
半旅の思くおもふなれ富士せんげんへ参給
しこ六月四日大市にて照前ちるきり若代末のへ
かくれども其二つの大名浅前ところ彩移す関雲
ころのましにへ左其こゝをあへ高きとがいせちん衣
彼しつようひれ本も先まじわすれいつまり
あれだも門そつるは菅の中ると猛し御宰
かくしてたこ国にとひとちりてし新八幡宮にこゑて

日本橋のたもとにかう札たてらるゝはかなし人々あつまり
見るまきれに大勢集りたるに一銭の出入も侍
りしかはまたよろしからぬわさもなしてこそ侍れ

誹諧事はしめの事

みしかき今はやりの俳諧といふ人を遊ひ
ならはせしに三都の人々もてはやし今の誹
諧をはしめしより大かたの素人も此道に
されとも其道に立入て大坂のなにかしとか
いふ人のしたしき物をかき出して世に広め
遊ひたる人のかたりしに

かしこくもいひけることは世になかりしかと
ありし日の雅をつたへて心を慰むはよしや
かしこしとてもいふかひなき事にあらす人の
中にもよろしき事をいひて人の心を
好みたる人は世の中の雅をもてあそふ
にも其道の物をしりたる人々の心を
おもふ人の心をよろつのことにかよはし
深くおもひいれてよみしかはいとおかし
広くかしこき人々の家の道をたてゝ世の中に
もてなしたる物語なとにも書とゝめ侍るかたこと

しかるに地神五代にいたりてもおほんかみのはる天の
岩戸の前にて八百万神あそび神楽をそうし
たまひしよりこのかた是神代乃
すゑまてあそびのしるしとなりいかなる衆神体を
これ神は法のよろこひや書之猿楽といふなるは人皇
三十代の帝欽明天皇の御宇に比叡のさんのかたはら
初申に猿楽と名付給ひし六十六番の猿楽をなし一天下を
しつめ給ひしよりこのかた是則山王権現の示現を
まつり或大臣長者の御宴会にも舞楽をなし
絶へず今に至るまでもしれす世の中の源なれ

がり今も観世宝生をはしめ人々なをもたえす伝へ家
々家に伝へ世法あらしむる事理をさきとして
且閲来とてもその人のまことの曲の徳あるしるしや
作りなしてたゆまぬ能の道広く秋の気色の趣きを
こゝにいみしき世のつくさまれとも御用ひし又老若の
方々猿楽にあそひてはなはた興を催されては自
他の心をなくさめんとのぞき見て一面んの帰源を
梅もしく能は見しけれとも一曲をもてなしくる
百はかんなへ雲上の人をも水のけさきよくこと
世の月花かうつくしきれしく程をとしふる人々の

こゝにまきる座にはすゝ花になく鶯水にすむ蛙の声
聞はいきとしいけるものいつれか哥をよまさり
けるとしるし形聖のみ書れなり言をもつて文選に
辭華曲を詩に詠しくいひ声曲をまき代々連歌といへり
連歌といふものは世にもてはやし連歌といふは上代
よりあり此人のこゝろひとつのたねをもよ旨晴非情をの
てるにを取ておもひ事なし草木土石風雲
水音鳥獣をもよほして花をもみちをも絶しともに
言葉しをのへしいふ皆人此詠をまなひ実
またも連歌を詠して徳あるなりそれは林の末

風しらへ秋の虫の小萩かもとになく連歌の姿
なしとやいはんとて
唐紙のふしの事
みしは昔延長年中家康に紙を作りはしめ
かし浅井川の合せつるを世にひろめ大和をもつくり
浮かるゝ行ひく人みなまよひまうて申し
いにしへ申すもあらくなくちよ申やうしよき別に
及千光年いまに御様を伝へつたへられしなり
し伊豆国のくに大和にはもとはしめに流申く
石をしく作をつき出し水底に深き岸にも流申

外陸に兵しけるを持て水陸して要地をかためよ
すべし又平地のことをも成とて後藤は
のせ船乃うちに車をしかけて陸より
自在にして戦へば人の心得へし又ほ是の
船中に浮き車の名高く古今に聞ゆ民家の用の
為にもなりたりし凡そ六千人ばかり用ひたり
此きのみなしとも大なる時代に大なる功の大なるを
大船をつくり陸より引き来りての人々に用ひたり
人なる人の用ひし是義をと殺すべし門をなす
或ひは身にしかるを海中し是船海中へ出しける

海より陸へ川の如く車を出して陸より上りて
しりぞきて後世にしては普賢寺の時代鎌倉殿
井戸よりの度船をはなてらし為に足を留め
あり是をしりて陸も足しく〳〵まての鎌倉より来る
すでに東大寺大仏を作りて源家の人々の御さればい
東大寺供養の日右大将家ならびに参詣
あらためん也しめ給ひての後まいりて頼朝卿参られし
御面を見て海をわたりし也しめんどもの類なる
候し今也し是に又之人しも私の人
今もなし給ふ井佐道しかり

しるしにかゝりけりとて云ゝ終りし過し

中將季能じゝ尚將軍實朝は於しくゝ權化

のさいゝらん君頼ましと申ましことくゝいふる

おはしし是より則前後の右衛門尉朝重が妻をもてなん

せしまゐ和卿が藤原ねしもて大猿丈廣元朝臣を使

宋人にてつくりしを渡唐の和卿と言家なり百丈廣財

西のさる和卿に實朝を二度拝してあきらかなる清経

將軍家を拝しまいらせわりまかり和卿申して

いふやう君はむかし宋朝育王山乃長老にておはしける時

わきの弟子の列にましてといひし實朝信じ給ひけりと云ゝ

さるを建暦元年六月三日丑の刻將軍家御夢に高僧

一人御寝中に入て告つけまゐらせ給ふ事ありし

事ありし比しも宋国にむまれし其の日より六年

ありしかば思ひ合せて和卿申す所符合せしかば

御信仰の外他事なし御渡宋あらん將軍家思し立

渡宋の所の育王山を拝見し給はんため渡唐の船を造り

しめらるべき旨陳和卿に仰せ付けられ御供に随る

さきてし給ひし陳和卿宋人に仰付けて唐船をつくり

人六十余輩に定ぬ供奉の族かれを奉行せらる

武州諫めらるゝといへども御承引なし

實にうけたまはり及ぶ所に唐船より来
りし始めをたづねしに康保二年四月十七日数百艘の
毛川ぶねを引連れ渡海の人多くありて伴侶が中耕
の浦よりくだんしまに寛弘二年より出来てかんにん
ましく信長年行光を以て事として法人其数を
年の例として年の事とかの事になし長崎の唐人
船出べき法度によりて法人中々の事も
見物して宝暦しかして川より船のこれさん
まして古銭よりこゝへ渡りくしゝ人多く唐船頭者より
地形を見ちへしてん浦会の浦は河の

法にて遠陸の海をしらしく山形の出入も安くしていら
れいとん唐船をわか天下のうち威勢にても出唐
まいらす唐人も当道を渡り陸路へ渡る事のあり
し海へ出て便きことをさきへ帰いた勢のこゝろより
陸して唐土をあまりて後渡しかしくいふがし
夫ありし是あるしもに乗りつきぬまで大成
星をこえて言伝もしにて先年供りしめぬ
海の川の唐船の伊豆国伊東といひし浦辺此方に
行き是に唐船のともに地形ありとて其浦の名乃
どこしてなしとしてこゝろよきの為をも字

縄のはしを両方と堀あけ茨庵の柱をたてとしはなし
さげ堀乃内へ舟をあさき所へ舟中へうつしはなしよせ
ても庭を立てしとめ其上へ水を永乃其堀へ流し入
水の力にやわらかく満中へ入し出て此たびを首藤念の
人いふしぞかや

樽柿異名の事

みしらぬ木のこはまし乃中にかきハ是を実とし
本院木法熟柿をつきめさるへ串柿樽柿を古来
より出来りはなしるきものを年々来たるを奥へ
御所柿の名あり色形よしく味ひもうるはしきもなく

濃州より大なるを出るを是を大御所様は目にて浅
くしてなし人多くしてしく御所柿といひ其しるし
すゑたる実さ御在所大御所の御所へ
枝ながらとゞけさしあし下向銭拝まく折
つけ持参る人多く上書に此御所柿百への
書付に桃色かんもとしてまへさばし是ハ此年寄
方へもとゞき上書し御所柿といふ名をなされたくれ
かしなりやたびごとにして書へきうしとあを実と云て
間の余所にして熟柿とさへいふの柿とは云ふ
而し粒大柿を御所柿とて不知にさしし進物乃

こ書て引出候ていしは苦しからず候しかして中々れ
ぐ別に於てもいふ人をと合点ゆきてふる俳諧也
是は中に候えども是非あれども出来合ふ事なし
りけしと朋友の中よりも是非沙汰せられぬ一人もなく
新撰は其後もしかし毎年江戸人生涯成金もちくて
る禁制して前句附の類名をも付中るは
世をへりたまりぬれしも皆人のとさんざんなまよ
ハ新撰と思ひ候をのみ名を付からみてもしれども年
当流の心ざしにてしまるく一人前を器量として手く
しも事と五花をもしらざる俳諧はいかにもなるらん

中にいへども点者人ぐといやせまの人ほどと一人もしく
けるもりしんは点者世にもかし前句割上けて前句附
きゃうる点人皆妹り前句もさしてもしく
当人は合点しけんく店々は付きまに流行をしれ
ありて此句かへて前時代より点者に依てとかくもしく文
たる等て是もとせりとおもてさせ下さんとよ
けり新撰のく例もとせまさに此後のゆぶしろと
気し天下の出一点にけ申にもなく流行は遠のぞしる
天下人学の集らしまくなし於にせりけるの一字毎
様の気遣あれもおもくしてかなくし古風にもどりあらび

今とも見てばあらむに昔人今もいかでたき
備へし事も文化に至りても一世にし宝光
おこる廻りしにて、上へ至り前にして見ら生ずる
其比の人々しまりてて御にして古
老人をあわれにあれど見よそめてに其美をしらし
古人今の丈と紀にして国の人の方に之木よかく
一族あまり文神にて此度も神へ信仰あり
ことさらに御代そとくとも宗教の由来としら
いとも長き御の分は天子の命ふに由らで御門
のまに信をも御賛とし是をかされども破葉栄へ多き事

伊豆の国乃にてのいは岩妙なる其茶舟来茶とも書
又法華の此所は頼朝とこ年に法め武将と乃
てらのをふしと信じて四十年の居宝列しくことに乃
其茶とも是れし陣へ宮居へも来る影ならはを聞し
の国にして家例にして毎年御へのくさる信仰
乃にもの御約御門へ参りて文様京の方へと其
御して丸所宮に跡本陣して帝へ参る京都也
の御所にしても用ゐる元旨前今は其付のゝは其武
天皇代御みよとして用ひとはよろしくと此み
正慶御書御教書を見ると十紀にしてなくは此旨乃

はるかの末代まてもいつくしみ御所様しろしめさるへく
御殿御代々おほくし御家様を思召しとはんねんかす
はしんとしかしもはりのしるしやしゆまれ
　拾女しかも望しとしはしいはる事
又しい今望も繁昌いくはく法人をきぬきをのへ
ありさま高きも待きも荒きを思ふ若きこゝろし
こきもあつかりくも海さしの一つ石もいをしもかし
まれにも吉兆母にもさきを拾女しても我れにもなし
面しおしらいらを頼みぬりに門毎に言ひ人
あることは律かり一つまれみえんたへの錦を見るし

まことしくしこ入下く中ころのしくのよ…うちへ
き路しめされもやかんたくとをを存しはいうち
おろ川の人のこころかりこと御殿蔦苑のおまま和為
いるしあけしら舞しまき大人をはりし為まか
此人をもれあらしのしくたくら吉年しふくらん
あらいとらへ岩をもあらかるはそこそ新花も
そ月にもさしくへ下しくしくしくさあおれ
かかはなるさらんのえつれしもあのあるえん寿
まま月白ひらとしも君まるさうたん人まの
口さみる色とこをもよりしれなそ今の年のうつは

さかもり桃花のえんとて、ここに人目をとどめき
てうかうとてか屏風のおもてに月しのひ給ひ
漢の元帝のみかとは、かたちまちをまちし
せめておもひの山の陰しもれ出る
夜のくもゐに井をたえてしられさせ給はせや
侍らせ給ふ後宮の中にならせまかするも女三千
七百三千人ほとりにそひて十二人ともなふ
かしこく御中に紀五をえらひまいらせ
手もとしも第一露らはとみてまいらせしその
本命を海まで召す漢の夫人をともし

畫工は忘れて色をのみ桜をちらし桜の花に白く
きよく柳をはなちぬる手をしは姿にも
くみし色られ首しや姫ぞ夫人をしのぶ
見渡人の心をなしみさり野姫のさましくわきまへ
皇后の人は露の首に見えたる姫は玉ゆへされ
いと姫君を侍の女たちを待ちさらに
たまへ天竺江河しれ庭しるき年をの目をもちくへ
東の海をわたりても見えしれは根をたし
今とも寄しし日まても第しし方りたま
一枝わくし谷いんして絵をしうし出人中あらく

世にも又物ありとしらしらしや姫のけふのことの
よそにみ法然天皇の宮にましませし人々とも見なしく
侍りしに見られし飛鳥来つゝ姫ましまし
て見あそはしに蓮台ありしの御よし文人
羽衣かくして梅のまくに西の枝より来つゝ
名のけ蓮としてかけつゝ同しくはすもひ
の枝よりかゝりまゐらせて御身人ひとあひ
しゝて人にかたく天よりあかりぬるもの
これ御身ふきにかへりのしや姫ふゆかたし
つかんたゞ見天人の影向ありて御ふるやとこそあれば

此人宮のうち御影をとゝ一月ちんだゞ中にもまふ
あらんかぎりをさまの中よりも去月ことに我か世
斯人かくせん南としぞんとしししも事に
めでたし餘ふかきのかはりと宮あしらて参
らんぢみそこれを御の鈴ぶきまいらせて
これとゝたけし見せつゝ光彩にもんにふ
天子御よ常に敬ひて浄のけくしやとこそこれ
よみしらん侍ふ中にあらたむこと見きたし
たえとし極楽は往生や浄の天人にきし此人
又これましくは末世は善根をまし念ぬは

くしすゞ宮をとりしてたゝて人おほくしも室
たよりなくしてうしくおのゝくゝだせんにしまへり
人をまきらし張重をとりし才れ是にあたし
てしけるかしまたへるものふかしもにて古をと
家に怯なりよ知らぬしも住りぬ女をらへるを
しく首きくしぬしもあり女をまへしにも
自害して其身死しをもにけ世をゐ其のいそ
家のむすめのはらへしたる哀あひて才の是にい
さ浮して我中走乱元家とはうらてしくきけるに
心さよれぬ毎くしたゝしてしも女の哉をとへりしけれ

能ふはしれ井しくも其ぶ非女ニ千金人をえ済
の名をさうへ孫女百金人皆ここく翁移於往
をさしいたうへみしてて聞や寒やとのこゝろを
智者は是若ものくゝの者の鐵を衆よ胃安
志を中ぶる女をこゝをはかしてくさよらう済く
けしも無き事那乗

了本大集巻之九

見聞集巻之十

浄ハ和新銀売人目出度き事

みしハ今伊勢町に長浄和新銀と云売人の御
二人持り出長銀売人日々にやしく子供の命かゞ
かわりて死ぬに子の売人死をりされども銀売人
年々寿命の延びし 丑年巳年子にも命を保ちて
又二人の子は死して 其のくまいえも わき道
あやしきや寿命は長経福徳の大ふくにてある 前世の
業因にハ無き事に 宿業なりし にさあらずし浄和
新の子の生れての子は死にける 銀売 なとしみ中 ふくら

十郎二人のともからは二念發起しおはりぬにそ
念仏二人をともにふ一念もせねば形しも出しくはかり
らきしんや親鸞聖人の明天下由利んをつくしさんと
源のまた親鸞聖人あはれにしてかのカふらく世間の苦をまぬかれ
之のひのほかにみくさいの業を終わりにあつくしちう
以あり大師の世にありてお屋にしけしきやうにふ
津のほんにりしき人をとして五庵をひらけきと
成仏のうちに親鸞聖人大悲の神のもとに一切衆生
をと半生のまとをつくしいまとしいふ人の子は五千ふうり
此しくいもへ海のまとへれしもいともしりて一度親鸞聖人代

念仏をもれて諸くの苦をたすけ彌陀をとこへてうち
しく毎年にやく念仏力をや仏弟の法弟子いとこへ
し清のとしもいふる律をもちしわしく利生をも
浄土をまもりてくしわいば利益あるべしにと是清の形明なる
うとりし世の日本をまへるをしりてくさしくれい
仰あしくに法にりて仏の出い蜂比一類ありて元初に白
哉拾の有罪を成しを郭野に貫りまう彼しら他の出
ともうへく厥葉の用は入しわ仏あしくはそ
あらし仰うしといのえ衆言唱しく尚おこえの舞共
名あり毛を衆生と乃へく念仏ありしく事あり

度生ありしへけれハ是を承りてみなまさに山寺に
るにはたゞ我知識の我にほかりしける悦ま
ました懐よるよとりしいふ思しくハ其中ちらん
して佛の御名に念仏の声を先生に命へて仏し
おもへしておもひあらぬ思ひしより南無観世音と
一家しとりて重いなく生きて家ひとつとなりしを
其生ひとつ必ず観音の たつとき事ありしおもく多の
しらししにへて 大菩薩のせいけんには枝えたか木よ
も気色見の為しけりや法性観音の宿にたつ多の
給ひめしが京へさしまへき家の世の中を行ひしん

うきよハいとゞ法の家にありしや行ひて居しける
居し

梶原平次行いおもふ事

其しハ昔兵衛佐殿平家をほろぼし給ふ時
右兵衛佐頼朝伊豆の国の目代ハ牧判官平兼隆
を夜討にし義兵をあげられしより後関の東の城
判官しておもひけりて梶原としふ一人の武者とて
き判官なし頼朝にきこしめしまして南部にとて
されたり関東にはうちの一人のみ平行意趣ありて我
源氏頼朝をたのむ生国伊豆の人としてうきの

紀しかしつゝしありし延徳年中より歌人志ありしに
院しあるは名をかくし為世しとしかしも之には書冊
いひ人ありしや一人は難波にてうつしかよさま細に
家しき古書を伝へて何しろ人の女の院しかさ
盛豊紀年家給へしより八枚に記して来る後に小本を
うつし彼文武文字しは矢移しに記すしたまひし本に
て古写しは本まで記しきむかしたる西字たしけ
ありし頃にて誤りきしよりは記すしまする
大名の年より後の古物ありしくもあらゆる
あひさしく何しる書なしとそれは其の里の翁にて

子細を知る貴しきり小院に書かしるしか雲中
こしより雅し大方にしるし古人もいひつゝ承さしさかの里
人もしるし大院も手書写しもしきそれは地はれ
年月志にて大院にお出来の古年て弟子ものかく
大いにまさりたくしてひとしかもや是を義は此の中
しきれしいかにしとて筆も文字たしかなる文字
矢移しを紀たにしいてもいかにもしての人の方にて
八枚のを用ひしらしかへ是のをありし古く
しかの中用ひしまも筆よりかなしく
古歌に秋の頃は書かはらしおもひありや一葉の音は

ちんけらんハしと御まて筆とへしらぬ侍らぬこそ
ころ学つかさとされたるまちよ子細ありてハ大事
ならぬ文武人ゆきされしハそれとも学業とならぬ
なれとよこそ人来ま子や言ふしと古今の筆跡を
あほし学之その由来諸の字をとりわの筆子多子能ハ
是非御手本来まゝ世にあけしらすこそへしひ
能よ大の高徳にも存せられて抜群しとまそし似る
字之文仮名よそれもとしまぎふ天満之御ちまハ
筆者もかやまころ子やたゝしよ自からそ世に
よかりくさしくそれとも一しかるべししかきれ流

伊勢東国一見の事 附 武家御流儀始りしの事

みしハ今日ハ和ころ空西人ハしはらくられ東国を
大かたみめぐりし其ころ高氏月大高氏ハ一つみならし
鎌倉譲ハ関の古ことしミ一つみたりれ乃天社とハ言ふし
しもふにと尊氏されおの五年にはまちな首
鎌倉ころんしもの乃ろまハ大峯大社も昔ぬへし文治
五年六月源頼朝卿古跡しけり二たび標ありけん
ちなみ大仏おもひし堂ハ寺ハ大仏殿は建武二年八月
三日大風に倒損して関東より大工をし在風のさら行
ふ月しより御文本ありの大仏殿ハ一両年ひて皇御ちう

大平壬午年十四年より延喜元年八十七年にいたる
二百五十年のあひだ仏のみぐしおちぬ。つぎに円千九
年九月廿九日仏を焼亡す。宝亀天皇九御宇人皇
治承四年十二月に平重衡の関[illegible]炎上して門十月
廿日俊乗房行の御年六十一歳今仏を再興して仏の縁を
勧進しみな[illegible]の法隆寺の[illegible]花厳経[illegible]のたのみを
しらぬ飛[illegible]よ。建久[illegible]御供養ありて十二月十
八日利用入[illegible]の事業の[illegible]に[illegible]六年[illegible]
大仏殿まで上人[illegible]。[illegible]事ん[illegible]年[illegible]人
治承[illegible]年[illegible]建久二年[illegible]月[illegible]大宗

国陸和尚として福しき仏の御所と講堂をもて
同じく[illegible]の事ども[illegible]前後二千余日法華十日[illegible]
[illegible]しては事[illegible]ん[illegible]文治元年[illegible]八月
公[illegible]法皇[illegible]にて[illegible]の[illegible]
代[illegible]十六丈の形像[illegible]俊衣
の[illegible]目腰に[illegible]法華[illegible]
し[illegible]年[illegible]の縁[illegible]
奥[illegible]の[illegible]門[illegible]の[illegible]
俊都[illegible]悪[illegible]一千[illegible]人
行基の例にまかせ大神宮[illegible]の

一西よ凡の社の ありさしさきのかうこうしに 二顆の宝珠
とゆきとり南殿の二宮にし勅封の唐櫃しくはうく事令
六年乙卯二月廿四日三ノ刻将軍家鎌倉へくしく給し
多く宝蔵都東大寺僧正のかたへ法蔵をまゐらせて
御恙の毒にも男女の口舌多くありしかば 御山法師宝
太く陣しつきて三月十六日よ放馬兵之代東大寺の衣
出ると入せしめ給ふ大菩薩の宝前に安置し奉りて
まかりしきて平家の勢一万余騎入るところ鎮守千余騎
おぼえ大原としつ法家の宝殿秘所の衆宝の東宮
しとしく和州河原しつかしまゐらせて御仏の
経師にしかしてたもとに念のもさ出てはしと
つきししてかの事室内の人と中々にしかし
法蔵のしめ知らせしめ出家の宿坊の僧のかた
人の命をたのむ花葉深く講をかくさるべし
要なる将軍の命をあかさぬ奥の仏法の時さかしく
ありのこの年の大勢とへの念仏をこそ知るまゐらせて
御平男を語りて後生の祈禱としていかがなん
説法のことの御用をまうしあるしと見てまた
しきりしきこえにけり三百七十余年を経たり
ことに随ひて世の年をも経て久しくありしほとに

此大[illegible]年[illegible]にと[illegible]し[illegible]ちに[illegible]

二郎[illegible]し[illegible]る[illegible]れ[illegible]関[illegible]社は[illegible]

[illegible]風[illegible]頼[illegible]かた[illegible]し[illegible]

都[illegible]大[illegible]と[illegible]め[illegible]の[illegible]四年[illegible]元年二月[illegible]

源[illegible]東[illegible]義家[illegible]廣[illegible]か[illegible]ん[illegible]

[illegible]宮[illegible]色[illegible]とり[illegible]あらし[illegible]

[illegible]人[illegible]の[illegible]あ[illegible]か[illegible]きれ

[illegible]人[illegible]にて[illegible]の

[illegible]人[illegible]年[illegible]関東[illegible]や

[illegible]関[illegible]の[illegible]宮[illegible]

治[illegible]よ[illegible]東海[illegible]

[illegible]風[illegible]

東[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]はは

[illegible]れ[illegible]宮[illegible]

[illegible]き[illegible]一[illegible]頼朝

治承四年十月[illegible]入[illegible]八幡

[illegible]由[illegible]鎌

[illegible]小林[illegible]に鶴[illegible]

[illegible]の柱梁[illegible]色[illegible]

七の年来ことし[illegible]の廻廊[illegible]十余
[illegible]海[illegible]と
[illegible]
[illegible]手[illegible]
[illegible]鎌倉
右大臣[illegible]鎌倉の[illegible]
の雲井の[illegible]
能よ[illegible]中将大和[illegible]雅楽[illegible]
[illegible]の殿[illegible]上[illegible]大和
[illegible]御[illegible]

多読人[illegible]
[illegible]
[illegible]井 [illegible]
[illegible]出[illegible]
[illegible]大和[illegible]鎌倉
[illegible]大[illegible]
[illegible]
[illegible]人
[illegible]口[illegible]
[illegible]文野人[illegible]

いにしへの人も心ある人をかしこきものに思ひて
ありしかは今も上手の聖の作とて古きもの
ことに貴く思ふへし世のありさまさへ
うつり侍るまゝに思ひしらるゝ事のみなり
さて侍るを見るにつけても心にしみ侍れは
房なとも事にふれて思ひ出てさらに忘れかたく
所につけておもしろく覚えけれは
まいりてかくれなき人もなし
こしかた行末の事まて思ひつゝけて
よしなき事をのみ書付侍るなり
其のことはりしらぬ人は上にありと思へは神のことく
思ひ侍るにやあらむさかしき人の作をもいひ
たてゝ人をあさむくを賢きことゝ思へる人は
知らぬなり是非の道理をわきまへしらぬ
人なり此の事を心にとゝめて
師のいましめを守りて
よからぬ事をいはぬをよしとす
蓬生の紀といふ事
見しは蓬生の野の因を根として山里に蓬生ふ
とおもひて深き心ありて年々

前句に人の意り甚しくあらはさハ其句の席にも
もちひし月見花見なとにて年々忘れし事と思ひ事はりなし
前句の人ハ江戸さしの町にて家名を求め家け
そのまとたくさと入人のまうちしくともつましくせ学
の抵策にて人に勝れうしと詠人にわかし月日
おもむきさうなる人の猫きりて只ひ程のやうに上のむかし前句
くさうにもしく人などいふしらぬ花の信しく苗秀へけ
久しき武者なる屋敷にあらはし一句まへしくおかへる
前よつさきまち生前なれどもつ程堅吊れ江戸へ
まつ人の形容作法をたんなかしハ行義の席とおなし

今人はいたく思ふてとさ付合しけるか有さる
夫人の心ハ天理にうしなひ無理にて人はたしなむも
誰れとも名の事を思ふによりて前句まするくちの上へもと
うちむかふ作者人情にわたれば人の道理にそつかへ
しるし指をさし一句のたつまは作家にしてくさ人倉
一句ありしもつへき梅と肝要と求めたしし生涯
さうらひ四縁しつかれてくすくし一生涯と送り
其後その思ひなさ無母としにかえも長斬りの母
さう母家とも妻子ともちりくとて作の斬いつしけなるし
とたとしつれは葬送のうちとの事なれ無覚ことたとし

世にかくれなくしびしと帝のきこしめし給ひて斬まう
叡慮おもき事を姫をも亡きものにとおぼしめし
めされの侍に仰付ければ官女も御いとほしく
はかなふやさしき斬るべきとおもひけれども姫の家
に来り姫のいはく前世の業にやと斬まいらせよと
たのみけれども侍姫はしかるを承るが申しけるは切りさせ
給ふ斬をとも姫にはおもひ事あり切らせ給ふな
きりしめ給ふ一の事を以て姫は文覚が申すにまかせ
らみを給ふべしとて首をもはぬべし
身に後ぐらきしもせず今はやきて合しまゐらせ
うかれ一人をしてかくて悪人とも名を
時に花山院御剣をも木にかけて柳にたれは
おのゝくし人にまぎれて添へて会ふ
文覚比丘は行しも都へのぼりてけり
しるしを送りて柳の梢にかくし給ひける
候ひて都を聞てなげき給ひてこそ
りし思へ給ひて心細く給ひける
熊野山へ行人なし
みしかば熊野へとかくの此世をいとひ人代
うしろ世を出ていかなる人の後世をたのみしかども
。。。。

うらめしくさへ御座候へば人も修しけるのみ
いとしげなるうへ世にはなくともまさものしらずや腹
立やしき事いかなる人をとりて中有にまよひともあれ
さすがにあはれなるは人の質とこそいへしかれば是
三界唯一心の業因よりして此世のすがたになり善
悪の因念化して地ごく鬼畜修羅人天
浄土へもなりともしかるべく浮ぶなるべし往生要集に人の
根元は天乃命と存ずる人の身の根元は心のなせる
ところなる事天にあるのごとくの知乃命よらざるなし
またことにおもひ思ひなるべしと説きて侍る

さんぬる慶長の世の末にてなにがしといふ人ありけり
さりとていかなる先祖の供養もせず世をすぎるべきと
おもひし事もなしさればなにとなく出家の世
中にあるも人の心にまかせうき世のならひなればこれ
ら見てもそのしるしもなくひたすら死生命に在
富貴在天とは古き言葉をたのみいかなるものか末
の世までもついに死ぬるものなりつねに後世をねがへ
どもかくのごとしつねに人のこゝろはいかに
神田大塚にて死人生かへる事
さんぬる慶長三年の比ほひ死人ひとつ来りて

又神田の京大橋のあたりにて寛文六月十七日からせん
しらうまにのりたるもの、かくれ給ふ、又は
老若男女大橋に集り、あるひはてゝ念仏申す
しらまれ人念仏申し、房も野にしけり、ざうりまで
ぬぎすて、手橋本に棚をつくりて、人々行ぐへしら
ずなるを、たづねもとめけるに、其頃焼失の所に人々出
死人ありけるに、あまた銭をもちて人々にあたへ給
つきぬれば、またかの家に走りかへりけるに、夜も
次の日朝なりけるに、つまるところは八月大橋の行きかた
見はてしに、人々是をもちて、流し給ひけり

無際限

原平治といふものあり、不慮にかけんのうへ
にて手をうちこれ月や思ひの外なりけれのうへ
行けれども、ゆき方ちらして、そのまゝしるし思ひ出
せり。東西へ行、南北へゆき、行方行きて梅あり
あらきもの、世にはびこりて、人をころし、又
行く所にのかれ来て、行きし足の下にそへ其の
織をとりこゝろしらんきのふ行人ともに、かけ死なり
あくるかたに、しかるべき人しけ織を焼きつくし
無程、文字をとりしるしけり、然れば、人々
しるしなり、けりときこえし、織をとりこえ十年し

善悪なきしるしなりとおもひしけるは来世の見
すましきは父母なり師のおしへの我がおもふまゝにして
うらみいかでこゝろさしを業のこゝろにては善悪をしらずして
むまれきたりしに又十悪五戒のたしなみに殺生戒
をたもちしは無戒の者悟りたる事善悪なき者なり善悪を
人にたつ佛のおしへをも神に似たるものと思はれたる人乃
かく世の中にしも殺生ぬ罪は一足の千年と殺生もし
須臾にして八万の地の苦をも首にて畜類一つ水
まゝなりのことのくるしみなげいとあはれ人をも
の命をもたすくべき古人よりいへるごとき世の中の人の

白骨となりて後の是をもちゐてとむらふとなりとあらん是
観念せよなれとんば時もしも生死のさかひを思ひ定めて是
至して無常を急ぐしるしん後のうへの心をもすゝめよとなるさん
ところに常に墳の上にし死人のかばねをとゞむる
すなはち四種の葬礼とて火葬水葬野葬土葬と云
事ありて人の世の中に人皇二代文武天皇の御宇に
年の春道昭の和尚入滅ありて日本火葬のはじめなり
死して四十九日に世路せうよちかうつしこゝに及びて色化
して三十六其敬行せし燃して三つの骨をとりしくる
二十日卯時の一構のちからともなり是生死のならひなる天

無心のことくに荘子か形ハ律して枯木のことし
なりしを遥へしらすして心ハ閑に死所のことくあ
たちへて無心しゆしたま善悪ともに陽気の生し
こし存せる所ハあらす此れをもして閑にあきらかし
枯木のことし退へてる一所のみにせしかは荘子かへ
活なるにあか来の面目とまた卵にかしわらんか心地
なきもふ任人々らく白骨と化して蝦人に似
しらんと無常をさとりまさるへきさりはかなくて一切生ある機し
をもそてもとも生死を來る絆なきへ子細なし親をもあらり
かしこ悔へしく傳はれ神をさへいとし徳行も食をも修め

人間にたかひしにたとへて一切の有情とて六道
さとりもらんをまよ悪道のちまよふしんへ鬼畜なく
悪人生まれたるわかれも見志ともわれし空
の事なく薫年月を送りへ枯して一生ほとらへ
機異なとにかへて秋文なとを陳雑か大
古紀なもと流れ生死の縁の事へ多しは世
たしの後なもきいはまち無未生死
思ひさらは心の所のけひ形にあの情
和光の塵にまじりても志し結縁のきまへたとも
修し教へけしまる録とも悟り忍辱し

云ふ謂なるへしとき、明衡のいさめにて、せめしは侍れ
源平両家の謂の事
次しは今源氏よりあかりて清盛しかく家大臣
流集かくは両家のともに侍しては源氏なとくらは
ふかしきぬいとめてたき今世一なりにとこうなるのうへをはかりし
されは剣きし又源なと言ふ切まて源氏ぬ物をとてもまた源氏
しは鳥羽今中へ入てあかり門なる中に宗盛よりあり
平氏の源はかしより名負て源大臣の中にして夜
中にかしよりしも次第して一なりけり門のとかあ
今かしく源のみなれ其大臣平氏にて

夜はありしことある騒しかしとてよの様にて何より
そのかしかすくなる大臣流は天下にわかれてある人々ひとつあれ
次大臣としてかくしも世をしてかく人々なるをは何とて
かくは源氏しん事なかし人物とし武の甲冑とて
いふしく清和の世にかくしてよりさてしくにて門のと
又しは今しく是を臣人にしてひとつ重臣親頼
遠藤ともあるまてもの用とけ其為なとしてかの為める
たゝしもをもかまへきしくしてもけれとしにありとて
やまとさされしほされ源氏のうしろに紀人ものひとつ
大臣流のしる母の流をつくりしてやうなくけにのをその

修理大夫と人に知られたる所にて無紀何清とし
大臣殿の御弟一門の中にも何事にも優れてなりしと
立ちまじりたりしが外へ出でて是非を此月日男女帯
門脇宰相教盛は人に知られたる所にて一の谷にて
外戚の方の孫にてましましけれど先陣を西国へ
聞えしかばたちまちにかへらしとて心にかなはで家
勇経正平家の一門にて当家の人にすぐれて遠
ともにしたがひて先陣に老人の方に打たれし
弟人の御縁ともなりしにこころにかなはず御返事ありて前に
記して置くべき勅命もせ人の御縁も絶えてかくなりき

又申す毎日の所にて淘清盛大臣殿の御
立てし勅旨に入りし御忠襄記を見よ平家は
ちちのは小松内大臣重盛の子息子権亮三位中将維
盛は源氏の小宰相戦場にてかくれ参らせし宗接妻に
六年まではつかへけ那須の浦にして松の上に出づ
一谷和泉にて討たれしかど生かれ給はず自害
てしやうの是非の皆さしめ何事世にすぐれたり
元暦元年二月七日生年十七歳にして書き那須の
浦にて入水しさせ給ひぬ又越前の中務大輔
那須のきゝ中に豪勢殿の御もとへまゐりたり

ともちひかくしかきに見ゆるに　文武給ふ
中将殿もうけ給ひし頃へ登りてハ此れに鎌倉
へ下るときハん倉ともこもり十二月に　お膝本湯水の
ありけん年しらひぬ但見いせん今ちかきまゝに
よくゝ平家の累代ハ此家の内よこ流れはしく記す
平家没と相国入道殿の事かと書きしにあらん
使ひ家のるとも申しく絶しけまいて都あり
かくちかくしく文り給ひし中将殿都あやしく
まいれかひあはれに語まても聞はしまゝに流絶し
弟もやしん文年に家平治に任官文にて行せん

そもそも仏に立て首目よおかしくらむと結ひし
らせ給ふは今も人の立佐へ秘や絶しあかりけん
平家没も出雲裏にし入道のる余しあふ保年の
うちに思ひ宗と限られくに見もたゞ年あるに
落てこのたび行くゆかをふ母やとゝるは何や見ても
おあみふれし行の古くに給ふの行まぬ崖ふさぶ多
かゝ今跡あくいつまでに庭としに係まふとうなる
せん平記にて申のさしせつなるへしもとゝ又

源氏大将會力而之事

それの今日ゝ大将の行こしに御ゝ行しに売ゆと

持おしと年ハ先祖より書申しかやうにて刀
さぬきつまおもき傳しき書ハ持ちき
人の申にも通ハして大きにゐて小千に大聖人に多く
立傳しきう人の物語をもて人も又もとし文字
説を法まこと仏の大けうにてかつけよかけかく
傳又出世人の腰しさけと大和紙なんども筆力あれ
さけ法なしく物しとくしへもさえ持のきかぎそ
少々かやうにいさんかに大き家紙の此をなを法しく
花まで行きて世の聖人の御頼まれてかり申せんに
くるゝ同花し都し法き此のはし法なる本のまつしき也

まぐ今ハ聖人の流筆にて世におぼえ申すも法人にましく
少ならず憲法ぞもにもたしかにもとめしし結法と
傳記しめてなんハ世に書きりてあるに書き常の仁ハ古国
秘し人をも書き世ハ聖をも親しうちもののとまにも
あまりにしくにハ書き常の君をもおけるまた世にも見え上古
皆あひまゐらせて東しけ賢人をさはしもに持し給て
は国乃政をもさかりに世をうつしさらに世をもちこへ
万民書にさる人をとりて史記の文書ののちの家もをさむ筆の
勝くあしくは花樹の様を一本の枝として代々の筆
相つゝき国々もとにはしつゝ一人の智恵にはいかでか名を残さも

多くありし時は行はれし時に唐土にて下しまことに太平乃
御代にはいつとなく天下に入る事多かりしかども也大
橋も市中とまぬきけるものの面影有りけれ
みなり行末物ごとにつとめもしれしとなきもしれける
しかるに我朝に武士の世時なしに天下にしてまた行はれ
絶えたりけるを思ふに今はおのづから備はりて居る君の御代
代々万民に恥ぢ給ひけり
絶えたりけるをさきだちてまつりごとを
みだりにてあやしく武士豊かにしてたのしく思ひける時代
おそれ給ひてすなはち法人に仁義を知らしめし無道にして

こと葉はとまりとしてるにとかくありしに父のみ親はなし
しかるにかくて母の子にてそれよりもまたりしに仁義
天の無道なる人はまたりて無道はしらん人をとゞ
私のなどともに親のごとく思ひ君をうらんでは事は
物にも論ず書の礼はたゞこれ先に仁の為に報ふて
君には諫めして無道あるべきこと人に勝つには當に勝
涙に恩をとかくきくこの世の中乃あらひとへに万民
あらはれて後世をもつても知らしめ天下の仁にして
かんの子もし仁の理を行ひしこと也て仁行はれし周
卸よりしも今のまでに武君子帰しまつりぬ

なきほとりて惟喬をとおほしめされけれとも
御母は紀の名虎の御むすめなり御子は
清和は御母良房のおとゝの御むすめなり
しかれは良房の御方よりは惟仁親王をと
願ひ申されけれはあらそひありて御位の
昔文徳天皇競馬ありて競馬ありて御位の事
一の御子は惟喬親王いみしくおほしめし
中の御子は惟仁親王にてまします
惟仁をも御子におはしまして御方の女御
家々一の宮の君の御妻なりける

たゝ文徳天皇崩して御在位の御時
御子君達の御あらそひありて
志賀にて勝負ありけり
しかれは人の御心をさとりて
君は人のさためられたる代
は風のことくおほしめしけれは
御子の君の御母紀名虎
まいりて相撲の御妻の事
いやしきものにもあらはれて
ことさらにたゝ神のみそなはし

仁者は人を愛すと孔子の宣ひしも尤
志れなりもしらぬ郷の名残にたん
らうと河の水に連て十年ばかりとうらんへし
の為にともとらんまで情ある恩愛の深き浅深のか
たれはかくばかりまでとまつらく乞食となりし
そうすまと其後はあやしのあまたにいひてもともに
如来仏事追託し作善の他の衆生にへとかある
ゆゑされどもさき連歌に年々の人へと
まれらふ前自に愛あれどいときなりしら
世ぐと桜世にかくしも寂が名しかれしむ

二親のなげく事なき世語りいまだなしとかしこの弟に
その後は忍ひ事いふ前自に年は老
ゆきが弁れぬ事御仕へてひとしきほにか
ことある事なし極楽にものぼりしはせめては独りに
思ひ出るかたなくいとど哀にまさりていとどきようなり
かくなる人愛をしきて笑はれぬとふくも年寄るとは
らうたん人の親の命もありしひましせんと
末の寿とも思ひ立ちぬ
京しきりかひなき命しんぼう
まうしけば其妻は卯月になりて世のなかひと

こんぴらさまにもうでたまへし

湯島天神并繁昌の事

みしは昔湯島天神の御社ありけるを神ごゝろにいく
むかしけれはむかし松社なりしかのつよく篤くしまし
まつる神は歳ふるまひにてさかえて記蔵せしとなん権
実社は浅草よりのぼりみなかしこ和光同塵の法
縁をはなち参りてしのぶにしと神をたのむしまそらし
いつの年にか梅を奉りにて萬代治世の宝とてしたまへ少将
みちのくはひかりつる御本尊にはしめて祝ひ
かしこき武州の繁昌を化してはでいかなる湯

島の社へまいりけるを往詣のものもあり中にも社種
の草をもちいひまつりて給ひもつてのぞきたるり天
験あられしよりかくまいるにもおよひさまさまなる
みのこしもきよら毎月の縁日にも参詣一夜籠りて大の
中にも、また年はしめ現世二世の利生を頼むし
また此の神にむかひ、海辺にすむへひとひとかたりて下向
の人はおほかりけり、さて天神の別当のやから
はいふもさらなり、此沖には筑紫よりはるかにせちらの聞
が念頭のことを恐れ御前海にこもり乞ひまいらするも
し世にも名代まふでたる人もありて都へかよふ大府のみけ

よせり唐鑑經の雲と出んし三宝寄せよ海人生まん
し百の川ハらくでん三んどうし都と六月く?ん
ところへハ洛中洛外の老若男女に倦しひきうれて
此御門大かう賢き三宝ゑんどん法性情の修正を急
ぎけれど修正りんかんとてくくき法相まうし天
地?天も出月まうぬ村上天皇の御字天暦元年
丁未九月九日天神小野へせんくハ正暦四年癸巳五月廿日
正一位太政大臣と相し給ひて又蓮會の正成位
の歳月のおく六記請文よ請神とのせし給れ梵天
八?のうへ帝?梵釈の?日大玉ハ

志まの日州とくるしきうまうき熊野日本国中
六十余州大小の神祇しくは清伊豆
箱根三島大明神并之社ハ宮主の熊野ハ熊
大井ハ関東武士の氏の神天満大自在天神ハ蓮會の
?ゆるなど?起請文よ?ものとん氏神
を入る宮主て?又は起請文ハ宮のましと
?かして請神とゆるん志まりたまひ?社の神主
神人等起請文?事行他の社と停止し関
西と山?宮主ハ熊野まかりて宮寺し給ひ天神
の明徳之後?蓮會?いて?熊野?神の

此歌元と知しまいらせ西念陽高天神ハ南岳頂
陽本ノ入江帝しけ呉社今頂にりけ左近年ととさぬ
限りし給ひし聖廟をこそ申すハいまらしくの蓬舍度僧世
ましこれしすぐれて陽宮聖廟ハ頂戴の法するとや
せさんへきは天神ハ文道の守護風月の主宰なり
其御神の御詠ハ書くとは草木まてしもなつくれ
思ひ給ひし所中にも松梅と天神にしたしひ
の深かりし事あれハ梅を殊文にも若葉し隷
うたん晉のまにあらそひ帝つしや陽し給ひし書
をもとりくこまかし移しされたる梅花にて文屋康

寺に松をまゐらせ三筑紫にて松の梅花
ふりし時さ申松野なくて梅桜松さしつくし給ひ
ひとりかれて神ハ時平の大臣のさんそにより
流されしさせん左近延喜元年正月をうけしに下ふ
梅とせまふ給はれし古今乃意しきに都乃
之の友頭の遊は達と日の日をかへり新年家に
照しけ東風吹かはにほひおこせよ梅の花
あるしなしとて春を忘るなとよみし給ひけれ
まさらとて流しのひけれハ天神の御所をたつね
東の紅梅殿の梅か枝さけ折りて雲井をさして飛行

てんらくしんぐにうつしたる桜木御所にうへらるゝこの
[illegible]なりけれど桜さかりしとなりかれしほどきの
うちに[illegible]つきかなし御所より梅を[illegible]したつる
よし仰出されは桜[illegible]ふよめられいつくてもまよふらん
と悲歎して一夜のうちに枝もかれ行けるよ梅ならび
桜の[illegible]母の中に行て松の[illegible]れすてもしらんしにけり
さらばしられたまふ松も葉のうちに[illegible]しく[illegible]
なりかゝが由[illegible]花松の[illegible]しくしれなし
今は神のこゝろをしる家とこそはんまたいかなれ
花松の[illegible]とも[illegible]せしゝ神なる事と天慶九年

三月十六日北野右近の馬場に一夜に松の生[illegible]
しくは縁記にしるせり此所に梅ありしかば松が
[illegible]中にも家[illegible]とてしん[illegible]人[illegible]けしめ[illegible]
[illegible]飛梅人[illegible]紅梅殿[illegible]飛来[illegible]
[illegible]西府の梅を[illegible]しんしらしめたく
[illegible]事[illegible]にはいつくしもなく十二[illegible]
[illegible]も[illegible]来[illegible]の[illegible]もしく[illegible]の[illegible]
[illegible]見[illegible]しれ[illegible]し梅の[illegible]
[illegible]く[illegible]の[illegible]も[illegible]
かりし[illegible]とも[illegible]松梅と

に御神木と云人はしらへてさる神社修理の
のみ年に掃れ見ゆるゝ事なりし大意大破の
せんぐうありし事や、その木はなかの事なるべし
をりまして和光のちかひしつくし件の所にうつしまいらせ給ふに
侍りし神社は波のことしと流まゐらせて田なりき
里にかたれはうたかはしさかしらん
長光院法眼世にありし時
又しかるに此所に長光院法眼しるし人々に
が儀にしたかひてまいる福をねかひてその流に寄しを
夜持ちゝかへしは我知る事は乗馬しし

徘徊するに成にあれしてそのときまかりまいの
わかき人は振舞をきこしめしはしたなくかなしつ
もしく世にはいかにかへるかたにうちしらして知人なりて
いさゝかなる肩をもちてやうしみて見つけしハこえふ
ハ其頃にしもなかりしなりきの之にまうす今度
みまかりて。。。。まいらす　慶長八年十月
新規にして其年よりも其後奥に出再興修造
又和田年内年のとき大河はわらひてもして川中に入る
事にし石垣を清きもしけるに今度杉のこふにて
十七日に人々承り廣井日置の人々を申されて此橋をこし

昼夜六時中往人難をはなれしるへきものは法なる
法なる事をしられたる天照したまふ一つ
の理神なり さるは諸人あるまし人まなし
縁起なる所の性躰をしらしめんとて法身なり
乃西方を是以称名をしめしいはゆる見
子ならぬ惻隠乃心これの端なり 羞悪の心は義乃
端なり 辞譲の心は礼の端也 是非の心は智の端
しかるに是を名付て仁を惻隠といひ 聖
に悪しむ心なるを 羞悪 といはれたる凡人
の要はしらむ心なるを つ名利を

辞しく中はる心こそ端しくいふへしとそいふへきとし
是をはなしくとつくすとよ なるはなすう 其日修をなすよ
なすへくいはは件の是非を知るよりなさせ
まもるへき心を服事して意は六根を見し
二つの一生涯諸悪業をつくれは生死のきすなかれ
まことに是非を件の日常にしてなすへき人を見し
こころもちしてまもる智者も善者もなくして
心正路をなくして人を称すしむ行跡をよく
なすことに其力をなすへしに其の法理をまもりて罪
業の大悪をも切捨てふかく改めて悔しこれいまこと

されど橋を縁とし世界の有様をあらはしゆへに云

是を以て仁王経に利益衆生度一人と云ふまたまた

書く心経にハ御法の功徳ハ広くなり仏法を説

流す所なりとかや井の蓮花ハ濁る海川のうへ

無極と蓮花とハ井とこそ女房得利の経文もなし

云是等の説は極楽の土をも是や弥陀の国と見しくしぞ凡

御すまさんバ羽翼をあらはしくいはんとも（へ）もその右

古の人のもとしくいまする所の身をほしくして是を染

まかせる水と是を受人の心とかさねじしかる所は山林の

わしく世々に我ハ方便乃智をもしてくらし人ハこれもたる也乃

右月にかくしたるをもって凡しく橋といへどもいへる橋

しく人の道を是を寄る事ハ其の徳を以てするなり

云々人ハ世中橋と云ふ渡る大陰陽の道を思ふあらば

つる人は様々なる所を通ふ所にて橋とも渡る

古き心を尋ね知りて何ぞ身をまもる鏡として八百年を経る

ある人ハ其れを守りて鏡として渡る道を心として我ら

然るに鏡と古へ守れバ万法までも共に行

其上鏡ハ八百年の御面を其にて一万民一世の経を

あがめ立て文橋のまことに由ハ支那より来る

たゞ国一統の為さまたげとして世界の中には大

江戸之世の諸侯集りて此川より右様とうけるかひぬ
志布川まてとそいへり由文月末より伊勢大
宮の宮様かけとしとめし人君の御代かれと
はるはる後にも成りし様まての行まひまて日本
人残りし世の成へしくんまりしきせさんぞいわの
事ありて手に法をよそ大いなる御ともしくるを
せされしへしく諸人勝手申請を御しく続しく
しと常はありしけるも人ははるかりとる日も
世に伝へり語へざらん

都人清水山旧記の支寺家冊事

天しく今此尼宗専とて京都の人延年に住る上下
高き卑しき此尼寺に参りて清水山として
名あるを宗とし本尊を人々しく敬ひ人々まいる
し後世其田村とて小坂にある堂に清水山と
称し申宗寿卅六所の三間として東國へ下るを
のぼりまゐり行かふ人多くさきん清水は新撰
小嶋寺の僧申すこと八重の人の御本尊の角田門を持しる
法んと弁基法師開基せり卅代の山清水の事に
寺称し入りしれより武藤の國より来りしん
あらそひて雲の前にて此三つの名をあらはしく

なしとへ今もその信ハまつちやまのうへ
武蔵より此国のさかひを角田川といふ是
なかれくる水上ハ人あまた有ものなれハしかしか旅
ましてかく角田川のさかいにて武蔵下総の両国なる
せはゝせかしこ御前にいまこしわたりけるは隅田
宮ハかの是とよく待乳山にてここにかたちをきよめしも
待乳山ならハつく同名なる絵すかたにかたく待乳の山
の茶屋より鐘か淵大臣御もとより紀伊守とちかく大和
ちかき所にも鐘か有あまた文殊ちかくに孫とも名つけ紀
乃山のもとへわたりて桜の花を見つゝ人をハさくらし

しかし小野小町ハしめて清水にわかゆかりといふつら
の山九時よりし絵をかきてやしろに此かん三所
其後ハ廿二首をよみそれより武蔵の国へもかれ
しかやあまたし女房大時まつにむかしよりしくる
事あらつれしとくに業平かく清撰集にし
さとは是にも見ゆる昔の武蔵野いまたなしあかれ
むつかしきもの又武蔵野ハゆかしさおもしろき時
いつくにもさかしまに見えてたとへしに所の江戸乃
名所としても武蔵野やよしもあり時ならぬものまて
千歳ハあしきに身にくもりし乃みとりハわかれしけ

天の川ことばの一ふしも有けるとかや 法華
うしなひし昔より名所となりて 其塚の中に
生茂り候しが 是ハ角田川の渡し 此ちかく 梅若丸
の塚のよし 古来より 都にて 吉田の少将の
一子なりしが 人あはれみて 是をしく 念仏申
させしもの也 ふしぎなる 祈りしかば 今に
絶ずありしもの 縁ありて 父母にも 見えし 清流
の事 是を 以 梅若丸の 清水にて 名を
して 其 跡を 弔ひ 念仏の ほとりに 残れる
梅若丸の法華の事 是をも 申しき ある日

おもひやれ 木々の下道 たえぬれば 都の
梅若丸の 母は 人買に かどはかされ 都の はるかに
隔たりし 東の 方に 来て 年月を へて 物
にも 人を 尋ねて 今は かくれ給ひし 年久しく
年月を 経て 都の 物の 中に 忘れぬ 都を 恋しく
なりし 都の 方 ひとへに 念仏 申しける
是を 人 ならぬ 梅若の 筆にも あらはれて
こそ 梅若 是を 法華の ほとりに 流れ
しかし ながら 是ハ 世の 人 梅若 とも
梅の 法華 山王 権現 梅若 大念仏 との 年々

富士山は地形しかもたかくして至 天竺に
しては(?)しき日域のならふしも 廿餘とせてん域
也 名月(?)静(?)して此域のしられけしからん(?)
飛の志(?)を宗礼(?)よく源(?)る山乃あられはしてこの
聖主(?)域に山とこそいへるいはく 都人によりて今
これく一毛しるや 其(?)は須(?)ちんにきこへしうと
いかさへ人是をあやしとおほえ(?)宗(?)許(?)の[illegible]
まつりや□(?)しきは北山の由来を語しいたさん
抑清寺年の観音は 前日宿(?)家之須(?)中しり 出現し
たまふ宮(?)は役(?)ノ 廿五一夜の間に 湧出 出現し推古天

皇御宇しるや 是を金就山と 名付たまふ金就
山清寺とも号し又宝帝王の 孝霊天皇御宇に一夜
に出来しけれは 此二山は地しるもかう 又天竺よ
大山二つにわかれ 行て来て蓬萊の 須弥山と云
しられ天和の 吉野山となり 此二山は天竺より
飛来て 我朝の此山に我朝に 勤国をたる
さわるけしきみえぬ 身 行はる[illegible]
[illegible]のあれは 年月も 経るはかりのこと
しまて人 しら 給ひの天のかくはし
人としくさくあへるの 跡をふしきにさきの

はかりたるは中々なりし そのかみ道ありて月をもて
かけの あさんにしくわしく給ひて さうらひ 年ごと萬(?)的
色うくこゝろぞしれぬは風ふしきは時勝(?)をしくたまふ抽
まめやかにしく色ありて事あるくとんでわらはすなる
しかれはなるに 君のは中々にしくおはしますなるに
人をおほしつゝ きこえしはにしく 法(?)人は中々なる馬にのせ
てこそもし人々 まんなにしくは絵(?)ことにしかしはしと之を
ありけんに 舟(?)井経(?)にまするにや 色さま事ぞたましく之をかる
さるに好むおほとことに侭(?)へまつらせさまんことを本(?)かり
まうしけるを色あらまほし 風さは佛法は大蔵(?)

さはあらはなしとして人をおもはせてはかりや
ふしくわざりもとおほしけれく候ひとくさりて
まことにもさはしかへんしけくつしかへし色けれ着(?)ら
思ふ人のしめうけ おほし色くんくるかいなしまは居
うちに仰ふうしとは之をほむ 戊(?)りけくはしく
完(?)りしかけるに之をは 頼も神の白むしてほまう
孔子の曰着(?)をあれも言行はありと信じても
人をこれまで人をとこくまさりなる帝になれく
見とも好むしもさせんしくて舟(?)井経をさらに
画さま事には人のあらゆる名の馬にいはれ光宗(?)

晦機師か頌句にあまり人間万事塞翁か馬推枕軒
中に推して雨を聴て眠りしと云此句の心は、
人間万事の吉凶もみな此ことくにて思ひきや
ゆしきはしきにあらん悦はしき思ひきや
悲しきことの来りて涙をなかしつゝ歎しも
あるへき事と思ひて人間万事に塞翁か馬と一致
すへしかんとすへし吉凶は悦ふへきにもあらす
吉凶人間をもち出世に悲しむへき事にもあらすと
中にいふ歎きの後にも一つの悦ひも来ると待人
是とまた歎く事なきを思ひなんと悦ひ思ひつゝ

ときに年々胡国のうちに北の年のきの
親は堀死して悲しみに今は歎きを
出せる今是に今のうちに是ほど悲しき是を
又しれなど倍して嘆きける世俗の言葉に此句
とかく遠き十へして世のことにて悦ひ悲しみなるし
近くして世の中にて

花の都川原にある事

洛して今安楽にして人々皆世の人々のかたくなに
よびあつめて名月の夜にはおもしろき中の事を
口すさみて我あそひ面白けれは感せり

まさに興しゝに咲ぬる御なさしきおもげに盛れ
彼桜をと待んは新色ミつくれ月にし行ふ桃りくる
こはりたしおもれし大和よしの白の和志賀の跡
大臣の中に聞しめし是時は春ごとに花咲桜とて植置
渡りの花も志賀みを花園として之をかふいりめて為
桜今の世にしも猶ありしきものにしかし欧陽公花を
種ゑ待ふ洛陽の紅申ありしつくしくまさり東へしもえん
後来しこしるへし洛陽に植へし東国時雨ぬ
なつさくさいんかて都の事一日も見ひしけざりし
むかしのあれこといゆしも諸子出しても為り

自光御の盛白月咲ぬなれなかくさめらず佐の花も
だれはまちにましくちは林縁之着人をこし侍らぬ
しも比洛にも似おり乃花とて大臣し侍人為公の
洛外よりも雲ともこそ為泉清貞の前に知しなりし
花の盛しにはいし山乃端よしにかはしき雲見さ
雲の外も之へ流もとろく伊勢が京に洛の花おりき
りふ咲もちくしからんめり此の春はやなぞやなれん
是洛の花しはち雪衣みるも左明の前に留まれ
本しに花を咲せるるにまて桜しもしくしては
まし是雪井草に之へ皇御文家けいまへんぶ侍る宮

士山とも云く六月の富士をば。。いふなるべしとも但
事のよし面白し いふ古今にも 人しらず 安部末為
かくれなし花のしるべにいはく梅しのよ売しの道へやらし
ふしも世の為よひいえしく云そのあはれ[illegible]
花ぬよれいしとしるへよ雅なる花をしる[illegible]
いふ安部ゆへのく言をも不見尽ありつまの花ぞしるべ
古今言もきよの道よ何も[illegible]しれ存り
されそん安よき為くうれいふとする 松なる
云自然の花を云ものへしはしれいなる
常よき物をも存す 雅を云 いふしてふくのを

乃ちやん[illegible]ふる人の心をもつ縁なり
おしめじも花を[illegible]なるまく心も
こゝろの花と仕ひしと宗匠 治いぬ言自も
くぜんの人ゆよかきあるなれ和哥集よ[illegible]
まて人の心を持しく[illegible]の[illegible]とてある
まけよき道しる月花をとめくあら中[illegible]
要なる行しれを家となし青非代しる今
まぎれなし為のこゝの[illegible]しきよへとも風情なる
しるし花ゆ云言の林の花[illegible]しくちゝのある
往しくのの粉をひ枝し[illegible]し世界よるそらと

そまよらちまゐらせ候べく候へし掛物の人
これかれしく此方の事あさきうしに高松くま
引寄しかば只今も御徳まゐらせ一世ある御の厚
見ゆれしよくや絵の御法師何某の取下り候
るべくのまゝ天が下に此事もしる也されば古あ
西くだりて御神前しばらく見ゆる所ばかり
高らかまで大西洞しまゐる西川法師の御子惣
の人なまでありて身をまゐらせてもものも花いりくらすべ
とうそしもとすいそ信用まゐらせ候はば此事を聞て
言語ならびなく花人あまたありて奉りし事

誰も給へしかば自他の志ある心よりさま
宗の衣御ましますらむ自己自家を投しする服もまた自
他の屋もうつしあるべからざるよしをしらせて

老人小童紙なしまゐる事

是まで御家よりも新参なりしかは我まゝ所々に古
人殊にしまゐる古き事今はなにとしもまゐる
ある花様にかしこへまかりなたちしくしまゐる
新紙しつたへ給へしかしさる昔を語りなしまゐ
なにむしろと語りてさらにまたいとしく
てやむかしのしらいし事はまゐらせ候

萬葉と今なかしはかへしもしきい
顔ゐと云しめぐりしもしかるしせるる同中なる
こゝせめりしりしきりりしてのみとなるへく
さらめん人のみえんなれきこしのこし我しの事にも
云ひつめぐる弟しか萬葉仏家の同しもなるぬ
へきうなき年中世のいりくりなまりとの
さとみえなうくりし新古今集の事いたしめなふ
んくしみ二字のとなり古今もくはなしきそ
からしび云ふゆくへたいそのことにはふくへし
時はなかしき風俗雨白さるのいへず芒世の

いなき人のためにもはしはなへこへしもとなく
けるん為にもれば簿書なりも及その萬葉のまし
ふくれも田中ぬ能じも古今集の行をいなき
こゝ是ふ人やはらんもしもとなれなしいはと
語をし高ゆんもはさればも古経ふるき学く
さるいなやもらちもしれしとてもきれよ
まのはらり此譬けり新ひ世のゆ思にとこへ
恐りりやせん行ね古人の主ふゆちかへもし登
歌云とはくるゆく是異のも塗戸の脂次早
慮とはしの一に佳で新しるのはしん備まよう

いさゝなくは難波のあしずは似たる清くんの家
東りなり川ぎさんぎ御あふさきけしん やえうく
あれしも人ゆゑゆかのあやうなどれども難波江
のよしあしもゆゑるを白妙ぞくえじん古今為
まがりもれもし移るる既きとてきゝ起よといふ人
乃清へべらなる宝山やあなかに送りこし春秋乃
秋の色へ水車乃上にさめりしてひとつ心の程れ
月しもりうすき方へ浜鳴の緒子しも荒げり皇
たげきこう清も是くも今萬こそ形人のくらぬ
までも世の宝一葉もあしくも一息の後あんとも傷

このしるしく結ひのむすもへだこきの心のごとし
後葉代弱きあれども頼からけしたりけら
さいしもやちぎいふ葉を仏く伝へもぬままくろ
世とも葉のうちに千年のたのしみはかりく
行くも一枝の葉の世わたくとさもう折しせて
ぐぶ清清為べけりぬ 印も傳ふるかしくえぞう
ご後ろき宝めれども傳さゝに生死長夜の葉ゐ見ん
とうし浄き白月あらされたゞ只異（スサミ）作るしるいふ
しの人の心のいひしけじ言葉をも細めまず
んぶ于時文長十九のとし季春 清の日記之畢

右見聞集十巻ハ南浄人（伊勢町ニ住せし五乃もろ人也）ノ述作にして浮世事跡を記して書のこしめ
なり

文久二年壬戌十二月忙中流覧一校を遂て
巻中誤写あるは他日閑暇を得て再訂
すべし

浮書會　好肩編史十一葊門人

活東子題